

茂山千五郎家 狂言アイルランド公演

アイルランドと 日本の邂逅 かいこう

W.B.イェイツ
ラフカディオ・ハーンと
狂言



アイルランド・日本
外交関係樹立
60周年記念事業
The 60th anniversary of
the establishment of
diplomatic relations
between Ireland and Japan

Celebrating
Japan Ireland



Ireland *Meets* Japan W.B. Yeats, Lafcadio Hearn and *Kyogen*

Shigeyama Sengoro Kyogen in Ireland

事業報告書 Report of Activities



Ireland *Yeats* Japan W.B. Yeats, Lafcadio Hearn and

Shigeyama Sengoro Kyogen in Ireland

Kyogen

アイルランド・日本外交関係樹立60周年記念事業

茂山千五郎家狂言アイルランド公演

アイルランドと日本の邂逅^{かいこう}

W.B. イェイツ、ラフカディオ・ハーンと狂言

2017 7.24^①—8.1^① ダブリン | スライゴ | ウォーターフォード

[主催] アイルランド・日本外交関係樹立60周年記念事業 茂山千五郎家狂言アイルランド公演実行委員会

[共催] ブルーレインコート・シアター・カンパニー

[後援] 在アイルランド日本国大使館、駐日アイルランド大使館、日本アイルランド協会、日本イェイツ協会
国際アイルランド文学協会日本支部、山陰日本アイルランド協会、日本ケルト協会、彦根市、松江市

[特別協力] 茂山千五郎家

[助成] 国際交流基金、公益財団法人関西・大阪21世紀協会万博基金、放送文化協会、滋賀大学

kyogen-ireland.org

目次

スケジュール	3
趣旨	4
狂言	5
茂山千五郎家	5
茂山千五郎家狂言アイルランド公演	
アイルランドと日本の邂逅—W.B.イエイツ、ラフカディオ・ハーンと狂言	6
プログラム	6
ダブリン公演	8
スライゴー公演	9
ウォーターフォード公演	10
在アイルランド日本国大使公邸夕食会	11
小泉凡・祥子夫妻 外務大臣表彰	11
ダブリン作家博物館「小泉八雲展」鑑賞	12
イエイツ・カントリー訪問	13
小泉八雲庭園訪問	14
広告デザイン	15
掲載新聞記事	16
テレビ放映	18

アイルランド・日本外交関係樹立60周年記念事業

茂山千五郎家狂言アイルランド公演

アイルランドと日本の邂逅 W.B.イエイツ、ラフカディオ・ハーンと狂言

事業報告書

〔発行日〕 2017年9月30日

〔発行者〕 アイルランド・日本外交関係樹立60周年記念事業 茂山千五郎家狂言アイルランド公演実行委員会

〒522-8522 滋賀県彦根市馬場1-1-1 滋賀大学経済経営研究所 tel 0749-27-1047 fax 0749-27-1397

〔編集〕 真鍋晶子、江竜美子、小泉祥子

〔写真協力〕 在アイルランド日本国大使館、茂山狂言会、岸本年矢、小泉凡

〔デザイン〕 石川陽春

スケジュール

日付	都市名	会場	日程
7.24(月)	ダブリン	13:00	スモック・アレイ・シアター <i>The Irish Times</i> 取材(7.27掲載)
		19:00	在アイルランド日本大使公邸 三好真理在アイルランド日本大使による公式夕食会
7.25(火)	ダブリン	14:00	ダブリン作家博物館 小泉八雲展鑑賞
		19:30-21:30	スモック・アレイ・シアター 狂言ダブリン公演
7.26(水)	スライゴ	午後	ドラムクリフ イェイツ・カントリー訪問① イェイツの墓、ケルト十字、ベンバルベン山など
7.27(木)	スライゴ	午前	スライゴおよび郊外 イェイツ・カントリー訪問② ギル湖、スライゴ県立博物館、イェイツ記念館など
		13:10-14:10	ファクトリー・パーフォーマンス・スペース ブルーレインコート・シアター・カンパニー『猫と月』公演
		19:00-20:30	狂言スライゴ公演
7.28(金)	スライゴ	午前	キャラモア巨石古墳群 先史時代の遺跡群散策
	ウォーターフォード	午後	ヴァイキングによる歴史的街並み散策
7.29(土)	トラモア	午前	小泉八雲庭園 小泉八雲庭園訪問 庭園代表アグネス・エイルワード夫妻と昼食
	ウォーターフォード	19:00-20:30	ガーター・レイン・アートセンター 狂言ウォーターフォード公演
7.30(日)	ダブリン	在アイルランド日本大使館	小泉凡・祥子夫妻外務大臣表彰 (長年の日愛友好関係に対する功績)

アイルランド Ireland



趣旨

2人のアイルランドの文学者が19世紀から20世紀へ移行する頃、日本と出逢い、両国に流れる心や伝統の葛藤を自らのものとして、斬新な作品を作りあげた。一人はアイルランドの国民的詩人・劇作家W. B. イェイツ(1865-1939)であり、もう一人はギリシャ出身の母をもち、父の国アイルランドで育ったラファディオ・ハーン(小泉八雲、1850-1904)である。この公演は、2017年が日本とアイルランドの外交関係樹立60周年となるのを機に、「狂言」という日本の伝統的な演劇表現によって照射することで、改めて両国の基層にある相違と共通性を再認識し、将来へつなぐ試みである。

イェイツは、ダブリンにあるアベイ劇場を設立し、アイルランドの民衆を鼓舞し、英国からの独立を目指す原動力となる演劇を模索していた。その時に、アメリカ人の詩人エズラ・パウンドを通じて、能楽に出逢い、新しい演劇を生み出した。パウンドは、アメリカ人美術史家アーネスト・フェノロサの遺稿を未亡人メアリーから託され、能楽を知ったのである。

公演の演目の一つは、イェイツがアイルランドの伝承を元に「狂言」として書き上げたという演劇『猫と月』で、日本の狂言界を代表する茂山千五郎家が、母国アイルランドで初演。イェイツの能に影響を受けた作品は知られているが、狂言として書いたとしている本作品は狂言との関わりがあまり着目されてこなかった。イェイツは終生日本に来ることはなく、『猫と月』も狂言として完成された作品ではなかったが、茂山千五郎家はイェイツ生誕150周年の2015年、「狂言」としての演出を施し、神戸で世界初演を行った。今回は里帰り公演ともいえ、同時にアイルランド、スライゴでイェイツの作品を演じ続けている劇団ブルーレインコート・シアターが、英語による原作のままの『猫と月』を西洋演劇として上演。このことにより、原作に内在する2つの文化的原点を、2文化の

演劇形態により提示し、日愛の文化的相克と共通性を再認識する機会となった。

一方、千五郎家はハーンが「再話」した日本の民間伝承を狂言化し、世界初演。ハーンは世界を放浪した末に日本に辿り着き、失われんとする民間伝承にアイルランドと通底する響きを聞き取った。それを「再話」という手法によって自らの英語作品とし、普遍の域に高めた。ハーン作品を狂言という伝統の舞台に乗せることで、日本の民話を描きつつも、その民話を見つめるハーンの視点とその奥にあるアイルランドの心を映し出し、2文化の個性と調和の姿を示す。今回は日本でも人気のある『ちんちん小袴^{こばかま}』を茂山千五郎家が狂言化し、世界初演した

世界が本格的なグローバル化の緒に就いた1世紀以上前、アイルランドと日本という異質な文化の邂逅により産み出された芸術作品が、伝統と現代性のある狂言という手法に出逢うことによって、新たな息吹を吹き込まれ、世界に発信されることとなる。日本の古典芸能、狂言の新たな可能性が模索されると同時に、日本とアイルランドの基層にある異質性と類似性を改めて提示したうえで、未来へ目を向けることは、大変意義深く今後の展開も期待できる。

なお、本事業は平成28年9月の十四世茂山千五郎襲名後、初の海外狂言公演となる。

公演に加え、「茂山千五郎家と行くアイルランド狂言鑑賞ツアー9日間の旅」を企画(旅行企画・実施:クラブツーリズム株式会社[担当]國分重希氏)、8名の参加者を得、スタッフが狂言公演の準備をしている間、國分氏と現地ツアーガイド、山下直子氏、岸田しのぶ氏が、参加者をイェイツ縁の地などに案内、参加者はアイルランドという国とその文化を満喫した。

狂言

日本の伝統芸能である能と狂言は、共に発展し、14世紀に現在の形の基礎が作られた。両者をあわせて能楽と呼ぶ。能が概して悲劇的で厳粛な題材を扱うのに対して、狂言は主として喜劇的でファルスのであり、能と能の間に演じられ、全体の空気を和らげる効果をもつことが多い。

能の主題は歴史、神話、古典文学から取られ、謡と舞で進行する。シンプルでミニマリストな舞台で、しっかりした型に基づいて演じられる。

笑いをその中核原理とする狂言は、能と同じ舞台で演じられ、最小限の舞台装置や小道具しか用いられない。市井の民衆が日常生活で遭遇することが扱われることが多くまた、民話、語り継がれてきたものがテーマとなることもある。



[撮影]上杉遥

茂山千五郎家

狂言を演じるのは、日本の狂言界を代表する大蔵流狂言茂山千五郎家である。江戸時代初期から、京都在住の狂言師の家として歴史に残り、400年にわたり狂言の普及・継承に勤めている。六代目から御所へ出入りを許される禁裏御用能楽師として、京都・奈良を中心に狂言を上演した。

九代目の茂山千五郎正^{まさとら}が彦根藩の演能に参勤していた時、シテを勤めていた役者が倒れ、その代役を見事に勤めた功績により彦根藩に抱えられる。藩主(井伊直亮^{なほあき}あるいは直弼^{なおすけ})が、「千五郎」と呼んだため、「千五郎」と名乗るようになり、当主名として代々受け継いでいる。

『猫と月』の中心登場人物を演じ、『ちんちん小袴』を新作狂言として書き上げたのは、2016年9月当主を襲名した十四世千五郎で、脂がのりきった芸を披露する。相手をするのは弟の茂でふたりの息の合い具合は絶妙である。今回は茂山千五郎襲名後初めての海外狂言公演という特別な機会であった。また、『猫と月』演出の松本薫は2016年バルセロナで開催された第1回国際イエイツシンポジウムで、『猫と月』の演出についての講演と狂言ワークショップを行い、世界のイエイツ研究者に新しい世界を広げた。今回、茂山千五郎により、小泉八雲の作品が初めて狂言化された。今後千五郎により八雲作品が狂言化され、新作狂言のシリーズ化されることが望まれる。



茂山千五郎



茂山茂



松本薫



島田洋海



山下守之

茂山千五郎家狂言アイルランド公演

アイルランドと日本の邂逅^{かいこう}

W.B.イエイツ、ラフカディオ・ハーンと狂言

プログラムA

ダブリン、スライゴ(夜)、ウォーターフォード

講演「W.B.イエイツと能狂言」

真鍋晶子(滋賀大学教授・実行委員長)

新作狂言『猫と月』

W. B. Yeats, *The Cat and the Moon*
in Japanese Kyogen Style

[原作]ウィリアム・バトラー・イエイツ

[日本語訳]佐野哲郎

[演出]松本薫

[字幕制作・オペレーション]小泉祥子

[目の見えない物乞い]茂山千五郎

[足の悪い物乞い]茂山茂

[聖者]松本薫

目の見えない物乞いが足の悪い物乞いを背負い、聖コールマンの泉へ、秘蹟による治癒を願い向かっている。ふたりは40年にわたって、お互いの体を支えてきた。聖泉に到着すると聖者は身体を治すか、祝福を受けるかの選択を問う。視力を快復することを選んだ物乞いは、歩けないまま祝福を選んだ物乞いを痛めつけて去る。祝福を受けた物乞いは、足が立たないはずなのに、聖者を背に負い、月を眺めて舞を舞う。

W.B.イエイツは、この作品を狂言として書いたと言う。アイルランド、ゴールウェイのイエイツが住まいとしていたパリーー塔近くの聖コールマンの泉について伝えられてきた話をもとに、謡や小舞といった狂言の伝統に基づいた世界が展開。

講演「パトリック・ラフカディオ・ハーンをめぐる日本とアイルランド」

小泉凡(島根県立大学教授・小泉八雲曾孫)

新作狂言『ちんちん小袴』

Lafcadio Hearn, *Chin Chin Kobakama*
in Japanese Kyogen Style

[原作]ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)

[作・演出]茂山千五郎

[翻訳]真鍋晶子

[字幕制作・オペレーション]小泉祥子

[女]島田洋海

[男]山下守之

とある裕福な家の美しい娘が侍に嫁いだ。娘の実家には奉公人がたくさんおり、小さい頃より身の回りのことは全て周りの者がしてきた。そのため本人は何不自由なく過ごし、とても無精者になった。しかし夫となった侍は貧乏で、奉公人もおらず、今まで周りがしてくれたことを娘は自分でしなければならない。ある時夫が留守の夜、隣の部屋に不思議な物音がするのでのぞいてみると、無数の小さな侍の妖精が謡いながら踊っていた。それより毎晩、妖精が出るようになった。帰宅後、早速退治を頼まれた夫がその妖精に斬りかかると、すべてパラバラと楊枝となって畳に散らばってしまった。楊枝(妖精)が言うには、無精な妻が使用した楊枝を捨てず、畳に刺して放置していたので、耐えられず出てきたと言うのであった。

日本の昔話を、アイルランド出身のハーンが再話したものを、再び日本の伝統芸能である狂言として上演、日本とアイルランドの伝統の上質のコラボレーションとなった。



新作狂言『猫と月』



新作狂言『ちんちん小袴』



古典狂言『蟹山伏』

古典狂言『^{かに やま ぶし}蟹山伏』

A traditional Japanese kyogen,
Kani Yamabushi [Crab Warrior Priest]

[翻訳] 真鍋晶子

[字幕制作・オペレーション] 小泉祥子

[山伏] 茂山千五郎

[強力] 松本薫

[蟹の精] 茂山茂

修行を終えた山伏が、弟子の強力を連れて故郷へ帰ろうとする。途中、江州蟹ヶ沢へ通りかかると、にわかにかが曇り、目の前に異様な者が現れる。その者は「二眼天に在り、一甲地に着かず、大足二足、小足八足、右行左行して、遊ぶ者の精にてあるぞとよ」という謎をかける。二人は蟹の精であると気づき、強力が金剛杖で打ちかかると、逆に耳を挟まれてしまう。それを引き離そうと祈る山伏もまた耳を挟まれてしまい…。

アイルランドの話には異界のモノ、妖精などに満ちていて、またアイルランドの人たちは異界のモノと共生しているとも言える。日本の異界のモノをアイルランドの人たちに体験してもらった。

プログラム B

スライゴー(昼)

ブルーレインコート・シアター・カンパニー 『猫と月』

W. B. Yeats, *The Cat and the Moon*
by Blue Raincoat Theatre Company

[原作] ウィリアム・バトラー・イエイツ

[演出] ナイル・ヘンリー

[舞台デザイン] ポール・マクドネル

[音響・音楽監督] ジョー・ハント

[照明デザイン] バリー・マクキニー

[マスク] ベッティーナ・ザイツ

[足の悪い男] ナイル・ヘンリー

[目の見えない男] ジョン・カーティ

[聖コールマン] キアラン・マッコレー

[ミュージシャン]

サンドラ・オマレー、ブライアン・デヴァネイ

Direction Niall Henry

Set Design Paul McDonnell

Sound & Musical Direction Joe Hunt

Lighting Design Barry McKinney

Masks Bettina Seitz

Lame Man Niall Henry

Blind Man John Carty

St Coleman Ciaran McCauley

Musicians Sandra O Malley, Brian Devaney

ダブリン公演

[日時]7月25日◎ 19:30-21:30

[場所]スモック・アレイ・シアター メイン・スペース(ダブリン)

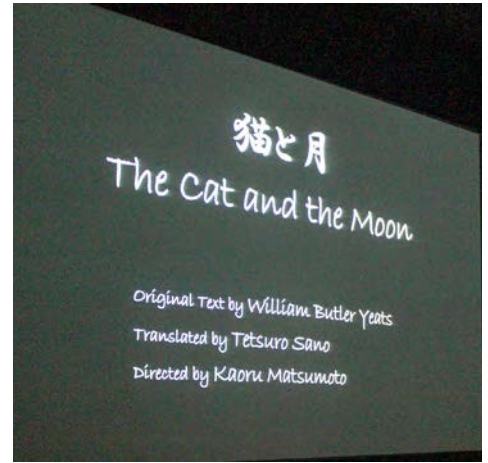
[参加者]約190名



アイルランドの首都、文化都市ダブリンの中心部、リフィー川沿いに位置する、ダブリンで最も古く(1662年創立)伝統ある劇場。古典から最新の作品までが上演される、伝統と革新が生きる劇場。

三好真理在アイルランド日本大使、アイルランド・英米の俳優、演劇やエイツ、ハーンを専門とする研究者、大学関係者、一般のファンなど、多様な観客が会場を埋めつくし、熱心に観劇、アイルランド公演初日に大成功を取めた。多くの観客にとって、初めての体験である狂言であるにも拘わらず、会場全体の反応もよく、笑いのツボをとらえていた。観客アンケートのなかには、「日本版のシャンノス(アイルランドで古くから伝わる伝統的な歌)」と書いているものもあり、観客の感性に訴えかけたことを感じさせられた。終演後も劇場内のバーで観客が興奮冷めやらず語り合い、楽屋にも、千五郎師の意見聴取をしたいという研究者たちの訪問が後を絶たなかった。





スライゴー公演

[日時]7月27日Ⓢ

(昼)13:10-14:10 (夜)19:00-20:30

[場所]ファクトリー・パフォーマンス・スペース(スライゴー)

[参加者](昼)約100名 (夜)約100名

イエイツはダブリン生まれだが、幼少時、母方の祖父母の家があるアイルランド西北部の中心地スライゴーで過ごす時間を大切にしていた。心の故郷スライゴーの周辺の文化、自然、そして人々が語る妖精譚、異界の話がイエイツの心深くに流れ続ける。スライゴーにおいて1958年以来毎夏1月近く、イエイツ・サマー・スクールが開かれ、国際的なイエイツ研究の中核を担い、専門家だけに対してだけでなくイエイツに興味のある人々にも貢献している。それと同時に、ブルーレインコート・シアター・カンパニーを率いるナイル・ヘンリーが、トレッド・ソフティー・フェスティバルを主催し、街全体がフェスティ

バルの場となる。スライゴーの住民や訪問者が、気軽に参加出来る音楽、演劇、展覧会、イエイツ・カントリーへのツアーが日々開かれ、文化が生活の一部となっている。我々の公演はそのフェスティバルの中心事業として招聘を受けたため、街中に狂言公演のポスター、パンフレット、大小のちらしが満ちあふれていて、道行く人々に、公演の人か?と尋ねられたりもした。観客は、演劇・舞台公演が生活の一部になっている人たちで、異国の異文化受け容れの自然さを実感した。公演は大成功で、心からのスタンディングオベーションを受け、歓声が会場に満ちあふれた。終演後も、ロビーで次々に熱い意見、感想、感謝をいただいた。

昼公演は、我々を招聘してくれた、フェスティバルの主催者、ナイル・ヘンリーが率いるブルーレインコート・シアター・カンパニーによるイエイツ原作のままの上演で、ヘンリーが、演出・主演を努めた。独自のマスク、照明、音楽を用い、狂言版との対比ができ、2公演並べることが、意義深い企画となった。

ウォーターフォード公演

[日時]7月29日㊥ 19:00-20:30

[場所]ガーターレーン・アート・センター(ウォーターフォード)

[参加者]約120名

劇場から13キロ余り離れたトラモアにはハーンが幼い頃滞在した家が存在し、また、2015年、小泉八雲庭園開園。それは、海外によくある日本庭園ではなく、八雲の地球3分の2周におよぶ片道切符の旅の人生と彼の精神性を、ひとつひとつに物語をもつ9つの庭で表現するユニークなものである。また、2015年日本から20名余りが松江市長からの寄贈であるラフカディオ・ハーンのリリーフを持参した際には、市長や子どもたち初め市民による心づくしの歓迎をうけた。同じ時に俳優佐野史郎、音楽家山本恭司のライブワーク「小泉八雲朗読の夕べ」が今回の公演と同じ劇場で開かれ大好評を博した。このようにハーンへの受容準備が整っている地であり、我々の訪問直前に雅楽公演も行われたり、地方小都市であるが異文化への興味が感じられる地であった。今回の新作狂言の公演により、日愛文化交流が将来に継続することが望まれる。



在アイルランド日本国大使公邸夕食会

[日時]7月24日(月) 19:00-21:00

[場所]在アイルランド日本国大使公邸(ダブリン)

[参加者]12名

本企画実現に向け、支援して下さった、三好真理日本国大使により、茂山千五郎家の面々、講師、事務局などのスタッフが招待され、公式夕食会が行われた。ホストの三好大使、終始実現に向けて、奔走して下さった広報・文化担当一等書記官山田有一氏とともに歓談、素晴らしい旅の始まりとなった。



小泉凡・祥子夫妻外務大臣表彰

[日時]7月30日(土) 12:00-12:30

[場所]在アイルランド日本国大使館(ダブリン)

[参加者]25名

小泉凡・祥子夫妻の長年に亘る日本とアイルランドの絆を支える活動への功績により、岸田外務大臣より表彰がされた。その表彰式が、在アイルランド日本大使館で行われ、本事業の参加者全員が大使館に招待され同席した。日曜日にも拘わらず大使館を開け、旅の最後に貴重な機会を提供して下さった三好大使、山田氏他大使館職員の方々にお礼を申し上げる。

日本大使館には、広報、会場の確保など、終始実現に向

けて様々な強い協力を頂き感謝の念に堪えない。三好大使には重要な支援をして頂いただけでなく、ダブリン公演にも足を運んで頂いた。山田氏には、企画の始まりから公演当日まで、適切なアドバイスを頂き、広報その他あらゆる面で支えていただいた。公演当日の様子が直ぐに大使館のFBにアップしていただいた。日本大使館の協力に心から感謝申し上げます。

また、アイルランド・日本外交樹立60周年事業を日本大使館とともに組織してこられた、アン・バリントン在日アイルランド大使を初めとするアイルランド大使館にも支援して頂いたことにお礼を申し上げたい。





ダブリン作家博物館「小泉八雲展」鑑賞

[日時]7月25日⑧ 14:00-15:30

[場所]ダブリン作家博物館(ダブリン)

[参加者]25名

松江の小泉八雲記念館で、日本・アイルランド外交関係樹立60周年を記念して現在行われている企画展「文学の宝庫アイルランド：ハーンと同時代を生きたアイルランドの作

家たち」と協力して、同時進行で“STRANGE THINGS—LAFCADIO HEARN’S BOOKS ABOUT JAPAN”を行っているダブリン作家博物館を全員で訪れた。小泉凡記念館長とロバート・ニコルソン館長の説明を受けながら、参加者はハーンの著書や草稿、写真を見て、夕刻公演で扱われる作品を生み出した作者を身近に感じていた。

ダブリンにて

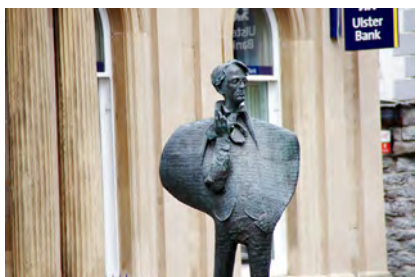


イエイツ・カントリー訪問

[日時]7月26日(水) 午後、7月27日(木) 午前

[場所]スライゴー及びその周辺:ドラムクリフにあるイエイツの墓、ケルト十字、ベンバルベン山遠景、ギル湖、スライゴー県立博物館、イエイツ記念館 など

今回の企画の中核に存在する詩人・劇作家イエイツ縁の地を訪問し、アイルランドならではの風景、気候を体験、作品の中に扱われる場所が生き生き意味を持ち始めた。スライゴーの妖精や異界との境界がかすかになる世界を参加者それぞれに、楽しめる時間となった。



小泉八雲庭園訪問

[日時]7月29日㊥ 11:00-12:30

[場所]小泉八雲庭園(トラモア)

[参加者]約30名

今回の企画の中核にいる2人の作家のひとりであるハーン緑のトラモアを訪問。2015年6月にオープンした小泉八雲庭園を訪問。庭園代表のアグネス・エイルワード氏、トラモ

ア・デベロップメント・トラスト代表アン・ハーパー氏などによる説明が行われ、参加者は、それぞれに、ハーンの生涯に思いをはせつつ、日本とアイルランド、自然と文化が融合した庭園を巡った。この若い日愛融合庭園が、今後自然と人間の協力によりどのように変化していくかを見ていくことの楽しみを心に、参加者は、トラモアを後に、ウォーターフォードでの、今回の企画の最終公演に向かった。



Shigeyama Sengoro Kyogen in Ireland
狂 Ireland Meets Japan 言
 W.B. Yeats, Lafcadio Hearn and
Kyogen

W.B. Yeats,
The Cat and the Moon
 Lafcadio Hearn,
Chin Chin Kobakama
 A traditional Japanese kyogen,
Kani Yamabushi [Crab Warrior Priest]

Tue 25 Jul | Dublin
 Smock Alley Theatre
 Exchange Street Lower, Dublin 8
 7:30-10:30PM: Talk & Kyogen
 Admission: €20
 Phone: 01 8720514 www.smockalley.com

Thu 27 Jul | Sligo
 Blue Raincoat Theatre Company
 Lower Quay Street, Sligo
 8:00-10:00PM: The Cat and the Moon
 by Blue Raincoat Theatre Company
 7:00-8:30PM: Talk & Kyogen
 Admission: €20
 Phone: 01 8750431 www.blueraincoat.com

Sat 29 Jul | Waterford
 Garter Lane Arts Centre
 O'Connell Street Westward
 8:00-10:00PM: Talk & Kyogen
 Admission: €20 / €6 concessions
 Phone: 051 835958 www.garterlane.ie

Shigeyama Sengoro Family, Okami School of Kyogen
 Sengoro Shigeyama XIV, Shigeru Shigeyama,
 Kaoru Matsumoto, Hiromi Shimada & Moriyuki Yamashita
 Irish Theatre: Blue Raincoat Theatre Company (Sligo)
 Lecturers: Bon Koizumi, guest professor of Lafcadio Hearn, Professor of University of Wisconsin
 Akiko Namabuchi, Professor of Sligo University

kyogen-ireland.org

ポスター

猫と月
 Ireland Meets Japan
 W.B. Yeats, Lafcadio Hearn and
Kyogen

茂山千五郎家
狂言
 アイルランド公演

アイルランドと日本の邂逅
 W.B. イェイツ
 ラファディオ・ハーンと
狂言

2017.7.25(土) 27(日) 29(月) ツー・ターワード
 2017 茂山千五郎家狂言本座「アイルランドツアー」第一弾

仮チラシ

狂 Ireland Meets Japan 言
 W.B. Yeats, Lafcadio Hearn and
Kyogen

Dublin July 25
 Sligo July 27
 Waterford July 29

W.B. イェイツ
猫と月
 ラファディオ・ハーン
チンチンコバカマ
 伝統的日本人狂言
カニヤマブシ

茂山千五郎家狂言アイルランド公演
 アイルランドと日本の邂逅

2017.7.25(土) 27(日) 29(月) ツー・ターワード
 2017 茂山千五郎家狂言本座「アイルランドツアー」第一弾

日本語チラシ

狂 Ireland Meets Japan 言
 W.B. Yeats, Lafcadio Hearn and
Kyogen

7.25(土) 7.27(日) 7.29(月) ツー・ターワード
 小見立 告知済み
 茂山千五郎家狂言本座「アイルランドツアー」第一弾

7.27(日) 7.29(月) ツー・ターワード
 小見立 告知済み
 茂山千五郎家狂言本座「アイルランドツアー」第一弾

7.29(月) ツー・ターワード
 小見立 告知済み
 茂山千五郎家狂言本座「アイルランドツアー」第一弾

茂山千五郎家と行くアイルランド
 狂言鑑賞ツアー9日間の旅 参加者募集中

狂 Ireland Meets Japan 言
 W.B. Yeats, Lafcadio Hearn and
Kyogen

Dublin July 25
 Sligo July 27
 Waterford July 29

W.B. Yeats
The Cat and the Moon
 Lafcadio Hearn
Chin Chin Kobakama
 A traditional Japanese kyogen,
Kani Yamabushi

Shigeyama Sengoro Family, Okami School of Kyogen
 Sengoro Shigeyama XIV, Shigeru Shigeyama,
 Kaoru Matsumoto, Hiromi Shimada & Moriyuki Yamashita
 Irish Theatre: Blue Raincoat Theatre Company (Sligo)
 Lecturers: Bon Koizumi, guest professor of Lafcadio Hearn, Professor of University of Wisconsin
 Akiko Namabuchi, Professor of Sligo University

kyogen-ireland.org

英語チラシ

狂 Ireland Meets Japan 言
 W.B. Yeats, Lafcadio Hearn and
Kyogen

Greetings
 We are delighted to perform these
 longer plays today, based on W.B.
 Yeats and Lafcadio Hearn's work
 both of whom are deeply related to
 Ireland, Irish history and culture.
 Besides, we are proud to share
 about more and more Irish culture
 with the people around the world.
 We are sure that you will enjoy
 these plays since they are being per-
 formed here in Ireland for the first
 time, but we hope they give you
 the pleasure!

Shigeyama Sengoro Family
 Okami School of Kyogen

kyogen-ireland.org

公演パンフレット

掲載新聞記事

- ◇「戯曲と狂言 母国で結縁：ノーベル詩人作100年 今夏アイルランドで」『毎日新聞』(2017年4月15日掲載)
- ◇「アイルランドで『八雲』狂言：民話基に千五郎さん来月上演…11月松江でも」『読売新聞』(2017年6月22日掲載)
- ◇“Yeats goes east: Traditional Noh Japanese theatre company play Sligo”, *The Irish Times* (2017年7月27日掲載)
- ◇「なるほドリ：彦根と狂言の茂山家の関係って？」『毎日新聞』(2017年8月9日掲載)
- ◇小泉凡「ちんちん小袴公演によせて」『山陰中央新報』(2017年8月26日掲載)

ノーベル詩人、ウィリアム・バトラ
ー・イエーツ(1865~1939年)
『写眞』が狂言に触発されて書いた戯
曲『猫と月』が創作100年となる今夏、
母国アイルランドで日本語の狂言形式で
上演される。大感流狂言の名門、京都の茂
山千五郎家が2015年11月に神戸学院大で
初めて狂言形式で演じた『猫と月』
—神戸市西区で、神戸学院大提供





戯曲と狂言 母国で結縁

ノーベル詩人作100年 今夏アイルランドで

山千五郎家が演じる。今年日本とアイルランドの外交関係樹立60周年で、関係者は交流が盛り上がりはと期待する。真鍋晶子・滋賀大教授(アイルランド文学)によると、イエーツは来詩人エズラ・パウンドらを通じ、民衆の魂をシムフルに表す狂言を知った。『猫と月』は1917年作。目の見えない男と足の不自由な男がたどり着いた奇跡の泉を舞台に、聖者が心と肉体のいずれの救済を望むか問う。狂言形式は狂言師の松本薫さんが演出し、2015年11月に神戸学院大で初上演した。

アイルランド公演では同国ゆかりの作家、小泉八雲『同』原作の新作狂言も披露。ものごさな女性と妖怪を描いたおとぎ話「ちんちん小袴」を基に茂山千五郎さんが創作した。

千五郎さんは「イエーツの母国で演じるのは光栄。日本文化を伝えたい」と語る。公演は7月25、29日、イエーツが生まれた首都ダブリンの幼少期を過ごしたスライゴーマハ雲ゆかりのウォーターフォードの3都市で。10月7日に滋賀県彦根市でも上演予定。【西村浩一】

「戯曲と狂言 母国で結縁：ノーベル詩人作100年 今夏アイルランドで」『毎日新聞』(2017年4月15日掲載)



Yeats goes east Traditional Noh Japanese theatre company play Sligo

Members of the prestigious Shigeyama Sengoro Family Noh theatre company rehearse their interpretation of *The Cat and the Moon* by WB Yeats, which they will perform at the Performance Factory, Sligo, today. See treadsoftly.ie. PHOTOGRAPH: SASKO LAZAROV/PHOTOCALL IRELAND

“Yeats goes east: Traditional Noh Japanese theatre company play Sligo”,
The Irish Times (2017年7月27日掲載)

なるほドリ



彦根と狂言の茂山家の関係って？

事があったんだ。とっさに代役を務めたのが、地謡として出演していた茂山家の祖先、千吾正用で、袴姿のままだったけど、見事に演じたぞうだ。

なるほドリ 今秋も京都の茂山千五郎家としてお話し抱えになったとされているが、彦根城博物館（彦根市金亀町）の能舞台で狂言を披露するそうだね。毎年初夏と秋に彦根城で公演があるけれど、茂山家はどうして彦根に手厚いの？

記者 実は茂山家と、彦根との間には江戸時代以来の深い縁があるんだ。彦根藩主だった井伊家では、彦根城本丸をよく、能・狂言の会を催していたのだけど、あるとき、お直亮の狂言師がシテ（主役）を演じている際に急病で倒れる出来

祖先・千吾 代役見事に演じた縁

10月7日「愛蘭士と狂言の出逢い」「女が主」2部構成で披露



アイルランド・ウオーターフォードの劇場で「猫と月」を演じる茂山千五郎さん（手前）と今年7月28日、茂山狂言会披露

郎」と変えてしまったというんだね。Q 今年の秋はどんな演目なの？ A 国宝・彦根城の部分をカタカナで読んだ。じゃったのかもしれないけど、何せ大ハトリの殿様だから、訂正も思うに任せず、とうとう名前の方を「千五」だ。第1部は「愛蘭士

（アイルランド）と狂言の出逢い」と題して、アイルランドが誇るノーベル賞詩人、W.B.イヤーツ（1865〜1939）とアイルランド育ちで日本国籍を取った明治の文豪、小泉八雲（ラファディオ・ハーン、1850〜1904）が原作の狂言を披露するんだ。演目は、目の見えな男が足の不自由な男を背負い40年間の旅の末にたどり着いた奇跡の泉での一幕を描く「猫と月」と、ものぐさな女性の前に夜中現れるおかしな妖怪を題材とした「ちんちん小樽」。Q 既に海外で公演しているんだって？ A 出演する茂山千五郎さんや茂さんたちは日本とアイルランドの外交関係樹立60周年記念として、7月末にアイルランドの3都市で公演し、大好評だったぞうだ。「猫と月」は日本国内で2回目の公演「ちんちん小樽」は初演。小泉八雲ゆかりの松江市と、彦根市で凱旋公演があるというわけだ。第2部のテーマは「女が主」。NHK大河ドラマ「おんな城主直虎」にちなんだ演目で、茂山千作、七五三、逸平さんらが出演。いずれも女性が現れる「聴梅」や直弼作の「鬼ヶ宿」などを演じる予定だ。1部、2部とも正面席4000円、脇席3500円、Cお市文化プラザチケットセンター（0749・275200）で販売中だよ。面白そうだから行ってみたい。回答・西村浩一（彦根通信部）

あなたの質問をお寄せください。〒520-0806（大津市打出浜3の16）毎日新聞大津支局「質問なるほドリ」係（ootu@mainichi.co.jp）

「なるほドリ：彦根と狂言の茂山家の関係って？」『毎日新聞』（2017年8月9日掲載）

ちんちん小袴 公演によせて

〈小泉 凡〉

「ちんちん小袴。夜も更けて候よ。お静まれ姫君。やあとんとん」

狂言師茂山千五郎のふし。八雲は日本では人工物に響き渡ると、会場は笑い渦に包まれていく。これは小泉八雲原作「ちんちん小袴」(「日本昔話集」所収)の一節で、使った爪楊枝を捨てずに畳の縁に押し込んでいた怠け者の姫珍しい。



茂山千五郎家による狂言「ちんちん小袴」 茂山千五郎家 狂言アイルランド公演実行委員会提供

今年日本とアイルランドの外交関係樹立60周年にあたり、両国をつなぐ作家、小泉八雲の「ちんちん小袴」が初めて新作狂言となり、このほどアイルランドのダブリン、スライゴ、ウォーターフォードの3都市で上演された。さらにアイルランドの国民的詩人、劇作家のウィリアム・バトラー・イエイツ原作の狂言「猫と月」、それに古典狂言の「罨山伏」も演じられた。

八雲原作の新作狂言 アイルランドに笑いの渦

今年日本とアイルランドの外交関係樹立60周年にあたり、両国をつなぐ作家、小泉八雲の「ちんちん小袴」が初めて新作狂言となり、このほどアイルランドのダブリン、スライゴ、ウォーターフォードの3都市で上演された。さらにアイルランドの国民的詩人、劇作家のウィリアム・バトラー・イエイツ原作の狂言「猫と月」、それに古典狂言の「罨山伏」も演じられた。



茂山千五郎家の皆さんと舞台上で写真に納まる筆者(手前右から3人目) 茂山千五郎家狂言アイルランド公演実行委員会提供

「猫と月」や「ちんちん小袴」の謡がそれを連想させたのだろう。実際、狂言も安土桃山時代に書承されるまでは口伝が中心だったと言われる。狂言は、アイルランドの基層文化の中核を占める伝統音楽とも響きあったようだ。

滞在中に訪れたダブリン作家記念館では、館長のロバート氏自らの手作りによる小泉八雲展が開催中で、松江の小泉八雲記念館の企画展「文学の宝庫アイルランド」の同時開催が実現したことも喜ばしい出来事だ。文学や文化の社会資源としての可能性を再認識する訪問となった。

小泉凡「ちんちん小袴公演によせて」『山陰中央新報』(2017年8月26日掲載)

テレビ放映

- ◆NHKワールド(2017年7月29日放送)
- ◆NHK Eテレ『古典芸能への招待』「狂言づくし」(2017年9月24日放送)

[主催]

アイルランド・日本外交関係樹立60周年記念事業
茂山千五郎家狂言アイルランド公演実行委員会

[共催]

ブルーレイコート・シアター・カンパニー

[後援]

在アイルランド日本国大使館

駐日アイルランド大使館

日本アイルランド協会

日本エイツ協会

国際アイルランド文学協会日本支部

山陰日本アイルランド協会

日本ケルト協会

彦根市

松江市

[特別協力]

茂山千五郎家

[助成]



[寄付]



株式会社 叶 匠寿庵



北風写真館



あなたの本棚 天龍堂
TEL:027-333-8100

野宮神社



阿部ひとみ

飯沼万里子

位田隆一

稲葉ちほ

岩上はる子

海老澤邦江

江竜美子

大坪敏

大野光子

小野慎也

亀山幸枝

菊地利奈

喜多村樹美男

小菅奎申

佐藤泰人

佐藤容子

佐野哲郎

諏訪友亮

三木善續

多田稔

妻波俊一郎

豊田沖人

虎岩正純

寅野滋

内藤守

西嶋勝彦

西谷茉莉子

西村浩一

原田美知子

藤原秀次

藤本黎時

本多三郎

ピーター・マクミラン

松田誠思

松村賢一

三宅伸枝

三好みゆき

村田真里子

森脇幸子

柳森壽人

山崎弘行

山田久美子

山野幸子

山本啓湖

山本正

吉田克明

(敬称略)

アイルランド・日本外交関係樹立60周年記念事業
茂山千五郎家狂言アイルランド公演実行委員会

[顧問]

位田隆一

市村祐一

[委員長]

真鍋晶子

[副委員長]

海老澤邦江

奥田良二

虎岩直子

内藤守

[委員]

小泉凡

佐藤泰人

佐野哲郎

高桑晴子

中嶋淑恵

本多三郎

松田誠思

松村賢一

森ありさ

山下理恵子

梁川英俊

山本正

[監事]

太田真

山本啓湖

[事務局]

江竜美子

小泉祥子

